

ディリック セバル (岡山大学大学院)
svldrk@gmail.com

0. はじめに

トルコ語は存在の意味を表す語「var (ある)」と「yok (ない)」があり、「var」は存在を表し、「yok」はその非存在を表す。

- 1) Bir kız-ım bir de oğlu-m var.
1 女-GEN 1 も 息子-1SG.POSS ある
((私には) 娘一人、息子一人がいます)
- 2) Hiç para-m yok.
全然 お金-1SG.POSS ない
((私には) 全然お金がない。)

トルコ共和国の共通語であるトルコ語イスタンブール方言 (以下、共通語) の存在表現の「var」は文法化が進みモダリティを表す場合がある。例 3 は話し手の意志を表す形式である。

- 3) Şimdi sen-in-le ol-mak var-dı.
今 あなた-GEN-と なる-INF ある-PST.COP
(今あなたと (あなたのそばに) いたかった。 (直訳: 今あなたといることがあったのに))

一方、トルコ北西部のチャナッカレ県の南西部に位置するサズル村を中心として話されている方言 (以下、チャナッカレ方言と呼ぶ) では存在表現の文法化がさらに進み、動詞の不定形「-mAk」¹に「var」が付加された結果、「-mAk vā/var」という新たな文末形式を成立させている。例 4 の存在表現の形式は話し手の推量を表す。

- 4) a. Sen-in-le ol-mak vā-dı. (ol-mak var-dı)
あなた-GEN-と なる-INF ある-PST.COP
((彼/彼女は) あなたのそばにいただろう)
- b. Sen-in-le ol-mak vā. (ol-mak var)
あなた-GEN-と なる-INF ある
((彼/彼女は) あなたのそばにいただろう)

上記に見られるように存在表現の「var」は共通語でも方言でもモダリティの意味を表す新たな形式を成立させている。この場合、共通語では存在の意味はなくなり、出来事に関する話し手の意志を表す。さらに方言では話し手の推量や推定等のモーダル的な意味が表出される。共通語では「動詞語幹 + mAk」という形式は名詞化された語であり、例 3 のように「var」は自立性が高く「-mAk」が付加することで動詞が名詞化した形で文法化するのに対して、方言では「動詞語幹 + mAk var/ vā」の一体化した形で表現されることから、両形式は文法化の度合いが異なると考えられる。

本発表では、トルコ語の存在表現「var」が文法化によって生み出した文法形式とその意味内容を記述し、同じような形式が共通語の場合、話し手の意志を表すモダリティである一方、地域方言の場合は話し手の推論や推定を表す認識的モダリティであることを主張し、さらにその文法化の過程について検討する。

1. トルコ語の存在表現

トルコ語では存在表現は名詞に付加されるコピュラを従えるということから文法カテゴリーとしては名詞的な性質を持ち、形容詞と考えられるが、名詞を修飾することがなく、単に述語として用いられる (林 2013:63)。その述語はどの人称とも共起し、時間とモダリティとの関係はコピュラによって

¹ 大文字は母音調和による音交替を示す。

表される (cf. Hengirmen 2007:242)。否定の場合、存在の「var」の否定は非存在の「yok」によって表され、存在と非存在の対立がみられる。

表 1. 存在表現と共起するコピュラマーカ

非過去	テンス (過去) (y)DI/ idi	モダリティ (ミラ ティプ・エヴィデ ンシャル) (y)mİş/ imiş	モダリティ (条件) (-sa)	モダリティ (一般化) (-DIr)
存在 var	vardı / var idi	varmış / var imiş	varsa	vardır
非存在 yok	yoktu/ yok idi	yokmuş/ yok imiş	yoksa	yoktur

これらの表現形式は基本的に以下の例 5、6 のように「位置格の名詞句＋存在物＋var/yok」という形で存在を表す場合と、例 1 と 2 のように所有を表す場合の二通りがある (林 2013:63)。

- 5) Salonda bir misafir var.

広間-LOC 1 客 ある

(広間に客が一人いる。)

林 2013:63

- 6) Okul-da öğrenci yok.

学校-LOC 学生 いない

(学校には学生がいない。)

林 2013:64

2. 共通語における存在表現の文法化

文法化とは語が持っている本来の語彙的要素が文法役割を果たす文法的要素に変化することである (cf. Hopper & Traugott 2003)。存在表現の「var」は共通語では以下のように本来持っている語彙的な意味と無関係な述語を成立させることがある。意味的に話し手が発話時に望んでいること、「あったら/できたらよかったのに (でもできなかった)」のように出来事に関する話し手自身の強い意志・願望や残念な気持ちを伝えている。

- 7) Gün-ün 30 saat ol-duğ-u bir dünya-da yaşa-mak var-dı.²

日-GEN 30 時間 なる-PTCP-ACC 1 世界-LOC 住む-INF ある-PST.COP

(1 日は 30 時間の世界で住みたかったのに。)

- 8) Elektrik-ler kes-il-me-se-ydi, film-in geri kal-an-ı-nı izle-mek var-dı.

電気-PL 切る-PASS-NEG-COND-PST.COP 映画-GEN 後ろ 残る-PTCP-3SG.POSS-ACC 見る-INF ある-PST.COP

(停電しなかったら、映画の続きを見たかった。)

- 9) Şimdi çok uzak-lar-da yeni insan-lar-la tanış-ıp arkadaş ol-mak var-dı.

今 とても 遠い-PL-LOC 新しい 人間-PL-と 会う-CV 友達 なる-INF ある-PST.COP

(いろいろな人と出会って友達になりたかったけど、残念ながらできない。)

- 10) Şimdi uyu-ma-mak var-dı ama dayan-a-mı-yor-um.

今 寝る-NEG-INF ある-PST.COP でも 我慢する-PSB-NEG-PROG-1SG

(今寝なかったらよかったけど、我慢できない)

- 11) Şimdi tez yaz-ma-mak var-dı.

今 論文 書く-NEG-INF ある-PST.COP

(今論文を書けなかったらよかったのに。(論文を書きたくないけど、仕方がなく書いている。))

上記の構文は基本的に「şimdi.....mak var-dı (今...動詞-mAk var-PST.COP)」という形式で使われるが、以下のような用法もある。この場合、話し手の意志や願望のみが表出される。

- 12) Asıl 1 Mayıs'ta burada ol-mak var.³

実際 1 日 5 月-LOC ここ いる-INF ある

(実は 5 月 1 日にここにいたい)

²例 7-11 は以下からの引用によるものである。

http://www.hocam.com/forum/363614/1/simdi_mak_vardi_anasini_satayim_dediginiz_eylem_nedir/

³例 12 は以下からの引用によるものである。

https://www.tripadvisor.com.tr/ShowUserReviews-g147271-d546919-r247116297-Plaza_de_la_Revolucion-Havana_Ciudad_de_la_Habana_Province_Cuba.html

- 13) Sen-i terked-ip de git-mek var ama...
 あなた-ACC 残す-CV CONJ 行く-INF ある けど
 (あなたを残して、行きたいけど。。。)

Şahin Çandır (歌詞: Ah bu şarkıların gözü kör olsun)

さらに例 9 と 12 の両方の形式を見ると動詞の不定形が不可欠の要素であるが、この場合「-mAk」が付加し名詞化し、さらに「var」は接続した形で名詞句全体が文法化し、モダリティの意味に移行すると考えられる。

- 14) Şimdi Çanakkale'ye git-mek var-dı, kordon-da çay iç-mek de var-dı.
 今 チャナッカレ-DAT 行く-INF ある-PST.COP、海岸-LOC 紅茶 飲む-INF CONJ ある-PST.COP
 (今はチャナッカレに行きたい。海岸で紅茶も飲みたい。)
 (直訳: 今チャナッカレにすることがあった。海岸で紅茶を飲むこともあった。)

大堀 (2005:4) は文法化の基準として「1.意味の抽象性 2.範列の成立 3.表示の義務性 4.形態素の拘束性 5.文法内での相互作用」のように 5 つの基準を立てている。この 5 つの基準をまとめて図式化したものは以下の表 2 の通りである (大堀 2005:4)。これらの基準が右へ行くほど、文法化が進み、文法化の度合いが高いということである。

表 2. 文法化の度合い

←低い		高い→
具体的	意味・機能	抽象的
開いたクラス	範列の成立	閉じたクラス
随意的	表示の義務性	義務的
自由形式	形態の拘束性	拘束形式
相互作用なし	文法内の相互作用	相互作用あり

上記の例 7-14 に見られる共通語の「var」のモーダル的な用法について大堀 (2005) で提案された基準に基づきながら考察する。すべて満たしていれば、文法化の度合いが非常に高いと言える。

基準 1. 意味の抽象性: 具体的に var が持っている存在の意味が希薄化し、構文にある他の要素と共に話し手の意志という抽象的な文法役割を果たしている (例:3、7-14)。

基準 2. 範列 (パラダイム) の成立: ここでいう範列とは一定の文法機能を表し、閉じたクラスの語として用いられることである。上記の例 7-14 の「var」はモダリティのクラスに入れてもいいと考えられるが、「動詞+mAk var」や「今...動詞-mAk var-PST.COP」のように「-mAk」名詞句と存在表現「var」と共起した形でないと、「var」だけではモダリティのクラスに入れにくい (例:9、12)。

基準 3. 表示の義務性: 特定の形態素による表示が、ある機能を表すために義務的に要求されることで「var」は本来の意味より話し手の意志を表すための不可欠な要素となっている (例:3、7-14)。

基準 4. 形態素の拘束性: 「自立語から付属語へ」という変化そのものを表し、上記の「動詞+mAk var」のパターンでいうと「var」は自立語から付属語へ移行しているように見えるが、名詞化した語に付加され、さらに「動詞-mAk+接続語+var」の用法も可能なので「var」はまだ自立性が高く、存在の意味を保った形でモーダル的な意味を表していると言える (例 14)。

基準 5. 文法内での相互作用を表すとするが、この場合「var」の「動詞+mAk」と過去コピュラの結びつきがそれに該当すると言える (例 7、8、9 等)。

これらの基準から話し手の意志を表すようになった共通語の「var」の用法の文法化について考察する。話し手の意志という基準 1 の抽象性、「var」はモーダルの意味に関する不可欠の要素ということで基準 3 の表示の義務性、そしてモダリティを表す文法規則の一部として「動詞+mAk」と「var」は呼応しているということで基準 5 の文法内での相互作用が認められるというように、5 つの基準の内、3 つを満たしていることから、共通語において文法化の度合いがやや高いと言える。

3. 地域方言における存在表現の文末形式

トルコ共和国で話されているトルコ語ではイスタンブール方言が共通語であるが、小アジア全域に渡って様々な地域方言が見られる。Karahana(2011)ではトルコ共和国の地域方言を大きくアナトリア方言とし、それぞれの方言を地域別に分類している。音韻論的、形態論的かつ統語論的な観点から考察した相違点や相互点を基準とし、トルコ語のアナトリア方言を三つに分類し、①東グループの方言、②東北グループの方言、③西グループ方言とする (Karahana 2011:1)。チャナッカレ方言はこの方言グループの中の③西グループ方言に所属するとしている (Karahana 2011:178)。

チャナッカレ方言で確認された存在表現の文末形式は基本的に動詞の不定形「-mAk」に存在表現「vā/var」が付加された結果、出来事に関する話し手の推量等のモーダルの意味が表出される。

3.1. -mAk vā の用法

まず方言による形態的な用法を見ると「-mAk vā/var」は以下の三つのパターンがある。

① 現在：動詞+mAk (INF) var

ex. İç-mek var
 飲む-INF ある
 (飲むようだ・飲むだろう・飲むかもしれない)

② 過去：動詞+mAk (INF) var+過去形コピュラ (-DI / idi)

ex. İç-mek var-di
 飲む-INF ある-PST.COP
 (飲んだようだ・飲んだだろう・飲んだかもしれない)

③ 未来：動詞+未来形 なる+INF var

ex. iç-ecek ol-mak var
 飲む-FUT なる-INF ある
 (今から飲むかもしれない)

「-mAk vā」の否定形を見ると共通トルコ語と大きく異なる。否定のコピュラや非存在の「yok」が一切現れず、「var」が付加される前の動詞に動詞否定専用の接辞「-mA」が付加される。

15) Hiç dışarı-ya bak-ma-mak var.⁴
 全然 その-DAT 見る-NEG-INF ある
 ((彼・彼女は) 外に全然見ていないだろう)

16) Ayşe içki iç-me-yecek ol-mak var.
 アイシェ お酒 飲む-NEG-FUT なる-INF ある
 (アイシェはお酒を飲まないかもしれない。)

このように、述語形式の「-mAk vā」は人称接辞と共に起する場合、文末の「var」の部分に人称接辞が付加され、名詞述語に付加される時と同様になる。「-mAk vā」は人称制限がないが、3人称での用法が圧倒的に多い。

3.2. 「-mAk vā」の意味・機能

チャナッカレ方言に見られる存在表現の述語形式は文法化がかなり進んだ結果、共通語と大きく異なり、話し手の推量・推定を表す。構文は1人称である場合、話し手自身の体験に基づく想起つまり後で気づいたことへの思いや推量を表す。

表 3. -mAk vā と人称接辞との共起

	1SG Ben	2SG Sen	3SG O	1PL Biz	2PL Siz	3PL Onlar
非過去 aramak (探す)	aramak var-ım aramak vāyım 私は探したかな(想起)	aramak var-sın aramak vāsın あなたは探しているだろう	aramak var aramak vā. 彼/彼女は探しているだろう	aramak var-ız aramak vāyız 私たちは探したかな(想起)	aramak var-sınız aramak vāsınız あなたたちは探している	aramak var-lar aramak vālā. 彼らは探しているだろう

⁴ 例 15-16 はサブル村在住の方言話者（女性、51 歳）の確認を得た作例である。

- 17) Karşıdan Ayşe gel-mek vā.⁵
向こうから アイシェ 来る-INF ある
(向こうからアイシェが来ているだろう)
- 18) Ni iç-ıyo-n öle... ğara ya u...
何 飲む-PRG-2SG そのように 黒 よ あれ
Çay-a benze-me-yo. Kola iç-mek vā-sın..
紅茶-DAT 似る-NEG-PRG. コーラ 飲む-INF 存在-2SG
(何を飲んでいるの。それは黒だろう。紅茶じゃないようだね。コーラを飲んでいるだろう。)
- 19) Göz-ler-i gō-me-mek vā.
目-PL-3SG.POSS 見る-NEG-INF ある
Kafa-sı-nı vur-dū-na göre ön-ün-deki guca dirē...
頭-3SG.POSS-ACC ぶつける-PST.PRTCP-DAT による 前-3SG.POSS-PP 大きい 棒-DAT
(目が見えないだろう。目の前にある棒に頭をぶつけてしまったから)

上記の用例 17-19 では話し手が目の前で起こったことや進行中の実態を自分自身の考え、想像や推論によって処理し、認識した内容を聞き手に伝えている。

- 20) Koli-nin iç-in-de i:ne oya-ları vā-dı.
箱-GEN 中-3SG.POSS-LOC 針 刺繍-3PL.POSS ある-PST.COP
ceviz vā-dı, yaprak vā-dı.
クルミ ある-PST.COP ぶどうの葉 ある-PST.COP
Çerez ğu-mak vā_ bi de. Valla bil-me-yo-m...
お菓子 置く-INF ある 1 も 本当 知る-NEG-PRG-1SG
(箱の中に刺繍があった。クルミがあった。ぶどうの葉っぱがあった。お菓子も入れただろう。ま、分からないけど。。。)
- 21) Doktor sana kıpırda-ma ev-in-den di-yo. Garı da illa sen-i
医者 あなたに 動く-NEG 家-2G.POSS-ABL 言う-PRG 女 も しつこく あなた-ACC
eğlence-ye çağır-ıyo. Eğlen-cek insan ara-mak vā.
遊び-DAT 呼ぶ-PRG 遊ぶ-FUT 人間 探す-INF ある
(医者はあなたに家から出ないでと言っている。その女はしつこくあなたを遊びに呼んでいる。遊ぶ相手を探しているだろう。)
- 22) Bunnar-a bak-ma-dı-n mı sen? Göstē-me-miş-sin gız-a bak Günay!
これら-DAT 見る-NEG-PST-2SG INT あなた 見せる-NEG-PF-2SG 女の子-DAT みる ギュナイ
E, bu-nu göstē-mek vā-sın. Bu-nu bil-ıyo-m di-yo.
あら これ-ACC 見せる-INF ある-2SG これ-ACC 知る-PRG-1SG 言う-PRG
(あなたはこれらを見なかったの。(ギュナイに声をかける) ほら、ギュナイ、彼女に見せていないらしいよ。あら、(あなたは) これを見せただろう。(彼女は) これを知っていると言っている。)
- 23) Kapı-yı ben aç-ık bırak-mak vā-yım. Ben-den sōna içeri gir-en ō-ma-dı.
ドア-ACC 私 開ける-ADJ 残す-INF ある-1SG. 私-ABL 後 中 入る-PTCP なる-NEG-PST
(ドアを開けっぱなしにしたかもしれない。私の後に誰も部屋に入らなかった。)

文末形式の「-mAk vā」では話し手の思考・想像によって不確かな心的状態が表現され、例 20 のように話し手の憶測を表すことも多い。例 21-22 では話し手がある知覚や感覚などの根拠に基づいて推定しているが、その推定は確かなことではなく、話し手の考えも含んでいる。例 23 の場合、話し手は自分自身の経験に対して推量をし、想起している。この形式は確実性を示しておらず、「herhalde (おそらく)、belki (たぶん)」のような様々な程度の確実性を表す副詞と共に共起するが、高い確実性を表す「kesin (きっと)」とは共起しない。

3.3 チャナッカレ方言における存在表現の文法化

共通語では文末の不定形が名詞化したものであり、それに付加した「var」は自立性が高いが、地域方言での用法を見ると「動詞+INF」は未来形では「動詞-FUT ol+mAk vā」といった形で「補助動詞 ol+mAk vā」というパターンを持つ。そのことから「動詞+mAk vā」という形で文法形式を成立させ、

⁵ 例 17 以降の構文はサズル村で収集されたデータによる実例である。話者は 50 代から 70 代までの村民である。

「var」は自立性を失い、不定形に付加するようになる。更に認識モダリティを表す新たな文法形式として用いられている。大堀（2005）の基準からこの場合の存在表現における文法化の度合いを考察すると以下ようになる。

基準 1. 意味の抽象性: 例 17-22 のように「var」が持っている存在の意味が無くなり、話し手の実態に関する推量を表す抽象的な文法機能を持つ。例 23 の 1 人称での構文の場合、話し手の想起を表す。このように本来存在を表していた「var」は、推量や想起を示す抽象的な要素に変更される。

基準 2. 範列（パラダイム）の成立: 方言に用いられる「var」は文末形式として「-mAk vā」というパターンを成立させ、認識モダリティを表す新たなモダリティ形式として捉えることができる（例 17-23）。

基準 3. 表示の義務性: 話し手の推量を表す文法形式で「var」は必要不可欠な要素である（例 17-23）。

基準 4. 形態素の拘束性: 「動詞+mAk var」のパターンで「var」は本来の意味を失い「自立語から付属語へ」という変化を表している（例 17-23）。

基準 5. 文法内での相互作用: 「var」は「動詞+mAk」と接続し、話し手の推量・推定等のモダリティを表す文法規則の一つとして不定形と呼応している（例 17-23）。

チャナッカレ方言においてモダリティの文末形式を成す「var」は上記の 5 つの基準のすべてを満たしていることから文法化の度合いが非常に高いと言える。同様の形式は共通語の場合、上記の基準のうち 3 つを満たしたが、方言の場合には文法化が非常に進み、共通語と無関係の意味内容の「-mAk var」という不定形と存在表現が一体化した新たなモダリティ形式が成立している。

4. まとめ

本論では、トルコ語の共通語と地域方言であるチャナッカレ方言における存在表現の用法を記述し、その文法化のプロセスを考察した結果、共通語でも方言でも存在表現の文法化が進み、モーダル的な意味を付加する機能を持つということがわかった。

さらに大堀（2005）で提案された文法化の 5 つの基準に基づき存在表現「var」における文法化の度合いを考察し、チャナッカレ方言の用法は共通語よりさらに文法化されたレベルにあることを明らかにした。共通語の場合、「-mAk var」は出来事に関する話し手の願望・意志を表している。一方、地域方言であるチャナッカレ方言の場合、「-mAk var/vā」は出来事やそれぞれの人称への話し手の思考・想像に基づいて、推量や根拠に基づいて推論によって新たな意味を表出する認識的モダリティであると言える。共通語では「動詞語幹+mAk」という形式は名詞化された語であり、「var」は自立性が高く、名詞句に付加した形で文法化するのに対して、方言では名詞化が生じず「動詞語幹+mAk var/ vā」の一体化した形でモダリティの意味を表すことから、両形式における文法化の度合いが異なることがわかる。

略記号

ACC:対格、ABL:奪格、DAT:与格、LOC :位置、GEN:属格、POSS:所有、INF:不定形、PST:過去形、FUT:未来、PRG:進行、PSB:可能、PTCP:分詞、PP:後置詞、COND:条件、INT:疑問の付属語、COP:コピュラ、NEG:否定、CV:副動詞形、CONJ:接続詞、SG:単数、PL:複数、1:1 人称、2:2 人称

参考文献

- Hengirmen, Mehmet (2007) *Türkçe Dil Bilgisi*. Ankara: Engin Yayınevi.
Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (2003) *Grammaticalization*. Cambridge University Press.
Karahan, Leyla (2011) *Anadolu Ağızlarının Sınıflandırılması*. Ankara: Türk Dil Kurumu.
大堀壽夫 (2005) 「日本語の文法化研究にあたって—外観と理論的課題—」『日本語の研究』1(3):1-17.
林徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』白水社。